

# クラス担任のための Career Guidance

2016 >> VOL.33

「キャリアガイダンス 特別編集」



## 失敗力を育む

生徒がいろいろな場面で積極的に行動したり、何かに挑戦したり。そんな力を育てていくためには、多少の失敗にもめげない様々な体験が重要。そのために必要な環境づくりを考えてみます。

取材文／清水由佳（ライター・キャリアカウンセラー）

## 前向きにチャレンジする環境づくりとは

### 発言しやすい雰囲気 クラスづくりが「挑戦」への一歩

これからの社会を生き抜く力として、自ら考え行動し、物事を成し遂げる力が求められることが多い。だからこそ、多くの企業で、採用試験の書類や面接において「これまでに挑戦してきたこと」と、明確に「挑戦」エピソードを聞かれることが増えている。ところが、最近の高校生は「挑戦」に尻込みしがちだと感じている先生は少なくないはず。実際、高校生自身に、「将来社会で働くにあたり、必要だと思える能力と現在もっていると思う能力」を問うと、必要とされることとして1番多かったのが「主体性」で2番目が「実行力」だが、自分ももっていると思う力とのギャップが最も大きかったのも、この2つの力だった（表参照）。

筑波大学附属坂戸高校の栗飯原匡伸先生も、生徒の挑戦意欲の低さが気にかかっている。

「コミュニケーションが小さくなっていると思うんです。友達ウケさえすればいいというか。そのため、あえて何かに

### 毎日のSHRで、生徒が クラスの良いところを発言

そこで、栗飯原先生が行っているのは、毎日のショートホームルーム（帰りの会、以下SHR）で、必ず「今日の良かったこと」をHR委員・副委員から

言ってもらおうこと。

「教師からではなく、生徒同士が相互評価する。それが大事だと思っています。最初は「良いことだけではないか、こうしていきましようというような話でもいいですか？」と聞かれましたが、そこはきっぱりダメです。クラスの良かったところを見つけても、もう一つは「良かったところを見つけても毎日、クラスの仲間が自分たちのクラスの良かったことを言う。それから担任・副担任が気付いたことを加えていく。次第に、クラス全体の雰囲気や柔軟な対応、体育祭での取り組み内容や席替えなど、生徒から積極的にSHRの時間に議題が提案されるようになってきたという。9月の文化祭に向けては、夏休み中もタ

スクンにグループで活動を進めている。

「私が生徒にお願いしているのは2点のみ。一つは、グループ内では必ず全員に連絡し、全員で活動するようにということ。もう一つは、意見が合わないときにケンカはしないということ。これまでの活動の様子から、意見を話し合おうとわかってきているようなんです。あえて意識してもらおうと思っ

### 生徒の成長を「信じる」 絶対的な姿勢が大切になる

中高一貫校の千葉県立日日出学園の進路指導部長、釣島ゆきの先生も、そんな生徒への信頼の重要性を

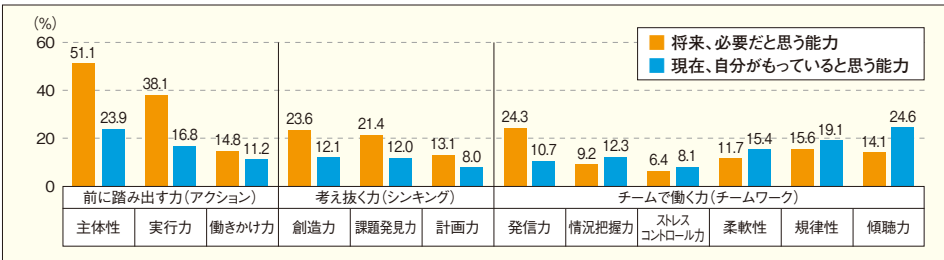
痛感している。

「昨年度から、中学2年生の職業体験は、学校がお膳立てするのではなく、生徒が自分の興味のある職業を調べ、それに関する企業や職場を探し、自分でアポイントをとる。もちろん、断られることもあります。でも、そのような経験も含め、生徒の成長にきつとつながる。実際、一生涯懸命職場を探して、普通だとなかなか見ることのできない職業、職場を体験してきた生徒ほど達成感があります。そういう生徒が報告に戻ってきたときのものすごくいい表情は、本当に印象的です」（釣島先生）

当初は、中学生ではまだ難しいのではないかと、何か迷惑をかけるのではなく、いろいろな心配の声もあがっていたという。しかし、生徒がやり遂げる様子を見近にして、「少し背伸びをして挑戦する機会を提供する大事さ」を、先生たち自身も実感したという。

「生徒には挑戦するように言いますが、どこかで教師自身が躊躇しているのではないのでしょうか。間違っているのだからやめてみる。生徒が主体的、自主的に動き出すのをどこまで待てるのか。教師自身が試されているのかもしれません」（釣島先生）

### 将来社会で働くにあたり、必要だと思える能力と現在もっていると思う能力（3つまで回答）



「高校生価値意識調査2015」(リクルート進学総研・2015年9月調べ)より



日出学園中学・高校  
進路指導部 部長  
釣島ゆきの先生  
国語科教員として、中学・高校生の授業を受け持つ傍ら、3年前より進路指導部長を務める。生徒だけでなく保護者も、既存の枠組みの中で生き残ることを考えがち傾向があるなかで、いかに低学年から将来を考える機会をつくるかに奮闘。



筑波大学附属坂戸高校  
国語科  
栗飯原匡伸先生  
一橋大学で学生支援を行うなど、大学での教職員経験や公立高校教員を経て、4年前より現職。今年度より、1年生全体のアンガーマネジメントのプログラムづくりにも挑戦している。大東文化大学で教職科目の教鞭もとる。

### 「挑戦」できる生徒を育むヒント



明治大学 文学部  
諸富祥彦教授  
もとみ・よしひこ／臨床心理士、教育学博士。全国の悩める教師のためのセルフヘルピングやネットワーキングを支援する「教師を支える会」代表。http://morotomi.net/

#### 1. 安心感・安全感を抱ける関係をつくる

生徒がまず、何かに「挑戦」しようと思ったとき、その場が「安心・安全である」ということが大事です。つまり、教師との関係において、常に評価基準をおびえてしまっているから挑戦ができない。「どんなときも、先生は見離さないよ」という関係づくりが大事です。例えば、三者面談や進路面談などでも、生徒が「こんなことを言ったら、何バカなこと言っているんだ」と叱られるのではと思うから、チャレンジしようしない。ちょっと背伸びしているなどと思っても、「そう考えているんだね」と受け止めてあげる。そんなふうにはチャレンジを受け止める姿勢が、まずは大切です。

#### 2. 何度でもチャンスを与える姿勢を示す

チャレンジすれば、もちろん失敗することもあります。うまくいかなかったとしても、それを責めるのではなく、「気にするな。大丈夫だ」と安心させる声かけも大事です。よく、「うまくいかなかったことを反省して次に生かすために、振り返りをしっかり行う」と言いますが、教師がそれをやらせることは「ダメだった」という評価をしてしまうことになり。ダメだったことは、本人が一番よくわかっています。特に最近、チャレンジして努力しても報われない時代、そんな風潮が強くなっています。でも、チャレンジしなければ何も手に入らないという事実です。だからこそ、「大丈夫だ。次頑張ればいい」と、何度でもチャンスを与える姿勢を、教師自身が示すことが大事です。

#### 3. 教師自身が、挑戦する姿勢を示す

社会全体の中にある、挑戦しても必ずしも報われないというような風潮を、敏感に高校生が受け止めているのです。先生たち自身も、何かに挑戦することを、ぜひ態度で示してあげてください。また、そのような挑戦や、ご自身の過去の失敗の話など、高校生にぜひ話してください。アドラー心理学の勇気づけです。人生にはやってみることも多いけれど、100回のうち3回でもできればいいじゃないかと。そして、「先生と一緒に走り抜けよう!」という雰囲気をつくっていくことも大事です。そういう意味では、特にクラス担任を担当する30代の先生方は、まさに生徒にとって良き「アニキ・アネゴ」(笑)として、ぜひ頑張っていたいただければと思います。

## Career Guidance

「キャリアガイダンス」誌は全国の高校に贈呈しています(校長、教頭、副校長、進路指導主事先生宛に郵送)

バックナンバーの記事はすべてWEBサイトで閲覧いただけます

http://souken.shingakunet.com/career\_g/

検索